

国家の嘘を見破った少女

——「子どもたちの靖国」——

松岡 勲

『靖国文集』の再発見

二〇一〇年六月、靖国合祀取消訴訟大阪高裁結審の直前のことだった。山積みになった資料と本の底から靖国神社遺児参拝文集『靖国の父を訪ねて 第十二集』（大阪府遺族会、一九五九年三月）が出てきた。一九五八年の中学三年生の時に戦没者遺児の靖国参拝に参加した時の文集だった。

そこには私の文章があり、「もう一度行こう靖国へ」となっていた。それは靖国神社本殿での宮司の言葉を記録していた。「この靖国神社は、お国のためになくなられたあなたの方のお父さんや、お兄さんの英霊がお祀りしてあります。此国がある限り、あなたの方のお父さんの名は後々まで残るでありましょう。今日も大きくなりたれた人々が、お父さん、こんなに大きくなりました。」と報告に来られています。皆さんも、もう一度やって来て下さ

い。」それを受けて、「私はなんとなく父は立派な死に方をしたんだなと思った。」と書いている。「そうではないか、現在色々な人が馬鹿な死に方をしている。それと違って父の名は後の世まで、この本殿とともに残るではないか。」とも書いている。「これが当時の私の認識だったのか？」と愕然とし、背筋に悪寒が走った。戦死した父の「死の意味づけ」を求める子どもたちの気持ちをこのように戦後も靖国神社は利用し続けてきたのだと思った。

戦死した父や兄を「英霊」として祀られ、その死の意味づけを遺児たちは教えられ、もし戦争となれば、遺児たちもまた次の戦争に動員される。そういった靖国の役割を靖国神社遺児参拝と靖国文集に見た。帰阪したときのことを書いた箇所、天王寺公園で靴みがきをする少年を見て、「君たちもガンバレ」と呼びかける私の「上から目線」には「いやな奴」と思った。当時の私は戦後版の「少

「国民」だった。靖国文集の再発見をきっかけに、国や自治体、遺族会が戦死者への意味づけを遺児たちにどのように与えようとしたのかを知るために、私は一九五〇年代の靖国神社遺児参拝の実像を調べ始めた。

国家の嘘を見破った少女

分厚い遺児参拝文集を読み進めるうちに一人の少女の文章を見つけた。それは河上孝子さんの文章だった。最初、靖国神社参拝前日の区役所での区長の激励の辞に対して、彼女は根源的な批判を書いている。

「犠牲は美しい行為である。しかしそこに意志が仿いで初めて美しいと言えるのであって、犠牲の気持ち無くして死んでいった者に、結果からみて犠牲の名で呼ぶのはかえって侮辱になりはしないか。父は召集令状、赤紙一枚によって操り人形と化され、別れたくもない親子、知人との別離を命ぜられ、且つ犠牲の美名のもとに死をも命ぜられたのだ。私は靖国参拝を喜ばしい事とも目出たい事とも思わぬ。こうした日を与えられた私を不幸と悲しむ。」

また、参拝当日の靖国神社本殿での神主の話に対して、決して動揺することなく、父の死が英霊として意味づけられることを拒絶していた。

『もう沢山』と叫びたいのを押さえながら、すすり泣きの聞こえる中を、私は終わりまで神主さんの顔を凝視してやめなかった。『寒い凍れるような雪の中、夏は太陽の下で国の為に雄々しく戦い死んでいかれたあなたの方のお父さま』。何と白々しい意志を持たぬ言葉だ。この飾りたてられた言葉が、幾千人の遺族に向かって語られたことか。おそらく神主さんの頭の中にその文章は暗記され、明確に覚えこまれていることと思う。明日も明後日も、遺族に向かって語られるだろう。私はそんな安っぽい話など聞きたくはない。私にとって父の死は、もっともっと厳粛な、そして寂しさとも恐ろしさを持つて存在するのだ。私の体の二分の一は父によって形造られたのだ。神主さんの話にすすり上げた人達は、話の何処に心ひかれたのか、私には理解し難い。本殿を下りながら、初めて私は



河上孝子さん 最後列左から2番目

悲しい気持ちになったのだ。このような反問の連続と、
もろもろの感情を私に与えて靖国神社参拝は終わった。」

この文章を読んだとき、一九五〇年代に中学校三年生
でこれだけの文章を書いた人がいたことに何よりも驚い
た。この靖国文集に八二五人が感想文を書いているが、彼女
の文章は同世代の文章群のなかで飛び抜けて鋭い視点で
書かれている。それと較べれば、私の文章なんかは主催
した行政や遺族会の期待に応えるものだった。なぜ、当
時の同世代の私たちと違い、彼女はこうしてこのような
文章が書けたのだろうか、彼女はどんな人だったのだろ
うか、当時の彼女の思いはどのようなものだったのだろ
うか、どのような家族と暮らしていたのだろうか、その
後、彼女はどのような人生を歩んで来たのだろうかと、
疑問が大きくなってきた。ぜひ彼女に会って、話を聞い
てみたいという気持ちが強くなってきた。私のなかで彼
女への憧憬が日ごとに大きくなっていった。こうした気
持ちに動かされて、私の「幻の少女」探しが始まった。

幻の少女を探して

彼女の手がかりは出身中学校が「大阪市立夕陽丘中学
校」で、今の時代には考えられないことだが（現在では個
人情報保護を理由に住所等は表記されていないのが普通であ

る）、当時の文集には筆者の住所表示があった。彼女の
住所は「天王寺区堂ヶ芝町三四」だった。しかし、現在
の町名は同じ堂ヶ芝町でも「一丁目」「二丁目」になって
おり、旧番地のままではない。それで、大阪府立中之島
図書館に当時の「住宅地図」があることを知り、その
「昭和三五年版」「昭和四一年版」などを調べた。地図に
は「堂ヶ芝町三四」の表示の箇所があったが、「河上」の
名前がなかった。

そこで、桃谷近辺を調べることにした。彼女の住んで
いた場所は「住宅地図」では環状線桃谷駅のすぐ前あた
りのようだった。半日彼女の消息を訪ね歩いたが、桃谷
界限はビルディングが立ち並び、一九五〇年代頃とは
まったく様変わりしていて、彼女が住んでいた場所は見
つからなかった。

困り果てて、彼女が卒業した大阪市立夕陽丘中学校を
藁をもつかむ思いで訪ねた。中学校では教頭さんが懇切
に対応してくださり、「夕陽丘中学校同窓会」につないで
いただけた。同窓会会長さんの紹介で、やがて彼女と同
期の同窓会（一九五九年三月卒業、第二〇期）幹事さんと会
員さんたちに連絡がつくことになり、大変親身になって
相談にのっていただいた。

同窓会の幹事さんに同窓会名簿に当たってもらったが、

「平成一六年の同窓会名簿」で彼女は「逝去」とあり、それ以前に亡くなられていることが分かった。私が靖国神社合祀取消訴訟に参加する前にすでに彼女は亡くなっていた。そのことを知って大変落胆した。その後、同期のMさんと連絡がついた。Mさんの話では、夕陽丘中学校卒業後の十数年後に第一回の同期会を行ったが、その時にすでに「逝去」との引き継ぎがあったとのことだったので、彼女は二〇歳代後半に亡くなったのだろうと想像できた。しかし、いつ頃どのように亡くなられたのか、つきとめることができなかった。Mさんからは貴重な「卒業記念アルバム 第一〇期 大阪市立夕陽丘中学校」をお借りすることができ、彼女の写真を確認することができた。さらに「靖国文集（第二二集）」に載っている彼女の写真も確認できた。

Mさんとお話したなかで分かったことは、彼女の住んでいた場所は「ひさや」という旅館だった。当時の「住宅地図」の「堂ヶ芝町三四」に旅館が確認できた。彼女についてのMさんの記憶は「とてもしっかりしていたが、どこか暗く、友達との関係はうすかった」とのことだった。同窓会の元幹事さんも、「先生にもはっきり意見を言うしっかりした子で、私なんか足下にも及ばなかった」と語り、私にはどこか孤立した孤高な姿が思い浮か

んだ。なお、当時の夕陽丘中学校は市内有数の有名校で、「越境校」だった。当時の生徒は近鉄沿線の奈良、八尾方面から越境通学していたそうで、一学年七〇〇名もの生徒数で、現在天王寺区に住む同期の同窓生数は一〇〇人程度しかいないと、同窓会元幹事さんは語った。環状線を挟んで、その内側に夕陽丘中学校校区の高級住宅地、外側に在日韓国・朝鮮人の集住地があるという社会環境を背景に彼女は育ったのだろうと想像した。

彼女には弟さんがいた。弟さんは彼女と同学年で、姓はちがいが、河野Sさんだった。事情は分からないが、河上さんのお母さんとSさんのお父さんが同居され、それぞれ連れ子であったのかも知れない。そこには戦後の複雑な社会事情が垣間見られる。

このようにして彼女は二〇歳代後半に亡くなったと分かった。弟さんにお会いして、彼女がどのようにして亡くなったのか、彼女のこと、彼女の家族の歴史のこと、また彼女がなぜあのような根源的な文章を書くことができたのか知れたかったが、その後も残念ながら弟さんは見つらないままだ。

（なお一九五〇年代の靖国神社遺児参拝については、拙著『靖国を問う 遺児集団参拝と靖国合祀』（航思社）を参照いただければ、うれしい。）